

氏名	樋口 温子
学位の専攻分野の名称	博士（芸術学）
学位記番号	甲文第193号（文部科学省への報告番号甲第706号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2020年2月28日
学位論文題目	近代日本における和服の変容 —西洋文化の流入に伴って—
論文審査委員	（主査）教授 河上 繁 樹 （副査）教授 下原 美 保 青木 美保子（京都女子大学教授）

論文内容の要旨

本論は、明治期から昭和戦前期という和洋混淆の時代に日本人が如何にして和服のなかに西洋の文化を取り入れ、さらにそれを発展させたのかを、衣服の品目、模様、素材という三つの視点から検証し、西洋文化の流入が和服にもたらした影響について考察するものである。

まず、第1章「明治初期におけるケープ付外套」、第2章「明治中期から昭和戦前期におけるケープ付外套」においては、明治初期から普及し始めた「トンビ」「二重廻し」「インバネス」と呼ばれる男性用の外套について、その形状と名称の変遷を考察し、西洋から受容されたケープ付の外套が新たな和服の一つとなるまでの経緯を明らかにする。錦絵や裁縫書を用いて受容当時の形状及び日本化に至るまでの形状の変化を考察した結果、日本では幕末の文久2年（1862）の時点で既にケープ付の外套が用いられており、その後明治31年（1891）には「トンビ」や「二重廻し」が和服として認識されていたことを明らかにした。和装に用いるため、後身頃にもアームホールを作る、ケープを長くする、身頃の丈を長くするなど日本独自の形状への変化があったことも確認されている。ケープ付の外套は、英国のインバネスのような洋装の影響をうけながらも日本独自に進化した衣服であり、これを新たな和服として位置付けた。

第3章から第5章では、明治末期を中心に女性の和服に取り入れられた西洋風の模様について、実物資料と雑誌記事から論じている。第3章「明治中期から末期の和服模様に見るアール・ヌーヴォーの影響」、第4章「『元禄模様』にみる明治末期の和服図案の近代性」ではこれまで十分に検討されてこなかった「光琳模様」「元禄模様」などの復古的な模様の中にみられる西洋的な要素を指摘する。まず、明治36年（1903）から38年（1905）頃にかけて、西洋の様式と日本の伝統的な模様を調和させた「ヌーボー式」と呼ばれる模様が流行し、さらに明治38年以降に三越の主導により流行した「光琳模様」や「元禄模様」の中にも、セセッションを含むアール・ヌーヴォーの影響がみられた。すなわち、「ヌーボー式」と呼ばれた図案は一時的な流行に終わったが、その後の「光琳模様」や「元禄模様」のうちにもアール・ヌーヴォーの影響が続いていたことになる。明治期の日本はアール・ヌーヴォーに含まれる新しい手法を「光琳模様」「元禄模様」という和服の伝統模様に移植し、再生させることによって新たな流行を創出したといえ、日本と西洋の表現が着物図案を介して影響しあっていたことを明らかにした。また、第5章「明治末期から昭和戦前期における裾模様の特質と背景」では、画一的と考えられがちな裾模様に焦点を当て、裾模様にも西洋文化の影響があったことを示した。武庫川女子大学所蔵の明治末期から昭和戦前期における実物資料を調査した結果、構図、モチーフ

フ、意匠化の手法、着こなし、地質などのさまざまな面で、近代の西洋化、機械化の影響を受けて、きもの裾模様に変化が生じたことを指摘する。

第6章、第7章では、明治期以降、西洋から輸入され、和服の素材として用いられたモスリンを取り上げる。第6章「明治末期から大正初期のモスリン友禅に託された縮緬への憧れ」では、明治末期から大正初期のモスリン友禅に焦点を絞り、外来の素材であるモスリンが和服素材として縮緬の代替品に留まらず、モスリンならではの独自性を得るまでの経緯を明らかにした。明治末期から大正初期のモスリンは、本来きもの素材として用いられてきた縮緬の代替として採用され、それゆえに図案的にも追従する傾向がみられたが、製造工程に工夫を加え安価に提供されるようになると、ただ縮緬を模倣するだけでなく、意図的に大衆品としての役割を果たすようになった。明治末期から大正初めまでのモスリンの図案と、それに関する記述を追うことで、これまで美術工芸的な面からは低く評価されがちであった当該期のモスリン友禅が大衆の日常着を華やかに彩る存在であったとして評価した。第7章「大衆の流行を映し出す、大正期から昭和戦前期のモスリン」では、武庫川女子大学所蔵のモスリン友禅裂を中心に、他の素材と比較しながらその特徴を探っている。実物資料の調査の結果、モスリンの特徴として鮮やかな色彩感が指摘でき、また模様においては、写し友禅でしか成し得ない独自の模様を表現したモスリン友禅が多く確認された。モスリンは、近代以降、西洋から取り入れられ、はじめは縮緬の代用素材として普及したが、外来の新しい素材ゆえに染織技術とデザインの両方で新たな挑戦が積極的に試みられ、和服に変化をもたらした。

本論では、西洋文化の流入にともない、新たに和服に加わった品目、模様、素材の三つの視点から、近代の日本における和服の変容について論じるが、さらに冒頭の序論では機械化と合成染料による技術革新や、「きもの」「和服」という語にも西洋からの影響があったことを述べた。和服という伝統的な衣服においても、西洋文化を引き入れようとする旺盛な意欲と、それを自国のものと同化させる柔軟さをみることができる。

論文審査結果の要旨

明治19年（1886）に出版された坪内逍遙の風刺小説『諷誠 京わらんべ』に「日本の装束（きるもの）も棄た者じやアない。むやみに洋服にかへるよりも、和服改良を図るといふのが、極の正論かと思はれますテ」と洋装化を批判する一節がある。西洋を規範として文明開化を唱えた明治政府は、軍服をはじめ、郵便や鉄道関係者などの制服を洋装化して、服装の近代化を図った。しかし、一般の人びとの間では、洋装化はさほど進行せず、馴れ親しんだ和服を脱ぎ捨てることもなかった。むしろ、西洋文明の波がひたひたと寄せるなかで、逍遙が述べるごとく次第に和服改良の道を歩みながら、服装の近代化が進んでいった。

これまで近代日本の服飾研究は洋装化の視点から語られることが多かったが、樋口温子氏は明治期から昭和戦前期において和服という伝統的な装いのなかに西洋的な要素を如何に受容し、さらにそれをどのように発展させたのかを、衣服の品目、模様、素材という三つの視点から総合的に論じ、近代日本の服飾における西洋文化の受容と自国における変容についての研究をおこなった。本論文において評価すべき点は、以下の三項目に要約できる。

第一は、第1章と第2章で取り上げられた男性用のケープ付き外套について、和服としての位置づけをおこなったことである。樋口氏は、先行研究をふまえつつもさらにそれを発展させ、明治期から昭和戦前期において「トンビ」「二重廻し」「インバネス」などの名称で呼ばれた類似の外套について、同時期の文献や絵画資料を参考にしてそれぞれの形状と名称の変遷を追い、海外からの受容と自国での変容の過程を明らかにし、日本でケープ付きの外套を和服として認識するに至る経緯を明らかにした。明治初期に英国から受容したケープ付きの外套は、和装のなかに取り入れられて「トンビ」や「二重廻し」と呼ばれ大衆化していく。明治30年代に洋服の着用率が高くなると、和洋兼用の「インバネス」があらわれるが、次第に兼用のものは

廃れ、それ以前に「トンビ」や「二重廻し」と呼ばれたケープや丈の長い和装用の外套が「インバネス」と呼ばれるようになった。明治期にさまざまにアレンジされたケープ付き外套は、明治末期以後は和装の品目として定着し、形状も定型となり、普及した。樋口氏は、「ケープ付き外套は明治期における西洋文化の流入にともなって作り上げられた新たな和服であった」と結論付けた。

第二に評価すべきは、これまで十分に検討されてこなかった明治期の「光琳模様」「元禄模様」などの復古的な模様のなかに西洋的な要素がみられることを具体的に指摘した点にある。近代の和服模様にもみられる西洋からの影響については、これまで大正、昭和期を中心に論じられ、当該期に西洋風のハイカラな模様が流行したことはよく知られるところである。これに対して樋口氏は、明治末期の着物の模様にも注目し、明治38年(1905)以降に三越呉服店によって売り出され流行した「光琳模様」や「元禄模様」に西洋のアール・ヌーボーの影響を受けた和服図案の近代性を指摘した。第4章では「元禄模様」に用いられた葵、槌車、蝶、市松などの図案分析を通じて西洋からの影響や明治期の新しい表現を確認し、「元禄模様」という復古的な名称の陰に隠れてこれまであまり注目されてこなかった西洋からの影響を明らかにした。第5章の裾模様にも洋風化の要素を見いだそうとする研究もこれまでにない独自の視点として評価できる。

第三に評価すべき点は、和服の生地としてのモスリンにも注目し、友禅染との関連を論じてモスリン友禅を評価したことである。外来織物のモスリンも昭和初期には日本からヨーロッパに輸出されるほど生産量が増え、国内でも大衆化していた。そこには高級品である縮緬への憧れが託され、すでに明治末期には縮緬友禅の模倣としてモスリン友禅が始められ女性の日常着を彩り、さらに子供服へも普及し、多彩な図柄が展開した。外来の新しい素材ゆえに積極的にさまざまな試みがなされ、和服に変化をもたらした。

以上、本論文は、衣服の品目、模様、素材という三つの視点からケープ付きの外套、アール・ヌーボーの影響を受けた着物の模様、外来素材のモスリンを取り上げ、近代日本の服飾における西洋文化の受容と自国における変容について総合的な研究をおこなっている。樋口氏の研究は、明治から昭和までの和服に関する文献、とりわけ三越呉服店の広報誌の記事などを渉猟するとともに、現在樋口氏が武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室の学芸員を務めることから、同館が所蔵する近代和服コレクションなどの実物資料を数多く調査するなど実証的な研究を積み重ねることで説得力のある論考を展開している。

なお、公開発表会の席上では、問題点の指摘や要望も寄せられた。例えば、英国におけるケープ付き外套の実態、あるいは男性の和服の素材、女性用の外套などにも研究の余地があるなどの指摘がなされ、今後の課題としてより広い観点からの考察がなされるように要望された。

しかし、これらの問題点を勘案しても、本論文は博士論文としての条件を十分に満たしている。本論文審査委員3名は、論文の審査ならびに2020年2月10日に実施した公開発表会とそれに続く審査会での口頭試問の結果により、樋口温子氏が本論文によって課程博士(芸術学)の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告する。